



NPO PTPL “ともいき” 便り No.45

■立春（りっしゅん）

2月4日から2月18日までの節気

（2014年2月4日発行）

“節分で鬼を追い払ったら、もう立春。”

「ともいき暦」を見ると、名アナウンサー加賀美幸子さんのすてきな声が聞こえてきました。「ともいき暦」は楽しく面白い。そのうえ歴史や日本人の生活習慣が解説されているので、「ナールほど！」と合点がいたり、「ふーん、そうだったのか」と納得がいたりします。まるで百科事典のようです。

2月4日、立春のところには次のような紹介がありました。

「立春正月、すなわち一陽来復して春になるという考え方からきています。翌日からが年の初めであること、気候が冬から春になるということで、この日は一年の最後と考えられ、邪気をはらい、幸せを願ういろいろな行事が行われてきました。豆まきをして鬼を追い出す風習は、中国から伝わりました」。

ああ、そうなんですね。なんと多くのことを、私たち日本人は中国から学んできたのでしょうか。「節気」もそうです。梅や茶の木も伝来らしい。

日本の生活習慣の中に、中国の文化文明がうまく消化されて、今日の日本文化の基礎が出来あがったというわけです。このことを「和魂漢才」と、勝田理事長は名付けています。中国や韓国は、長い間日本にとって恩義のある先生でした。つねに、仲よくして行かなければならない国だと思います。

節気は、生活の節目や自然の変化と表情を表わし、私たちに教えてくれる優れた、楽しい名前だと思います。明治の女、ぼくのおばあちゃんは、「このごろのは」という時、「この節気は」とよく言っていました。明治初期の日本、とくに地方では季節と節気はイコールな生活用語だったのでしょう。

このおばあちゃん「おくにさん」は、駿河湾の清水港がまだ江尻えじりと呼ばれて

いたころ、幼年期を過ごしました。近所に住んでいた清水の次郎長さんに、幾度となく頭を撫でられた、と言うのでした。次郎長さんは偉い人で、晩年、英語塾を開いたという。日本最初の英語学校だったかもしれません。

それにしても、立春。「春が立つ」とは、なんとすてきな表現でしょう。広辞苑を見ると、「立つ」とは、物事があらわになる、はっきり現れる、とあります。立春とは、春をはっきり感じとることができる、という喜びを意味して付けられたのでしょうか。春は単純にやってくるのではない。春は立ち上がるのです。舞台に主役が現れ、見栄を切るといった晴れやかなニュアンスがありませんね。

気付けば、大家さんの門の脇の梅の木の蕾が丸い粒となり、先端はほんのり白い色を見せています。

立春の前日は節分。豆まきです。子どもの頃、父がかしこまって撒く豆を、ワクワクしながら兄、妹たちと競争して拾い合ったことを思い出します。鬼（邪気？）を退治した豆を年の数だけ慎重に噛みしめながら、両親の愛情に育まれて大きくなったのです。ヒイラギの枝に鰯の頭を刺したものが戸口に立っている夜、近所からも「鬼は外！ 福は内！」の声が聞えてきました。

そういえば、近くにあった港区芝・増上寺では、横綱や大関といった役力士が、集った善男善女（？）に向けて豆まきをする習慣は有名です。恐らく江戸時代から続いた生活文化の習慣だったのでしょう。一度だけ、兄とぼくは父につれられて行ったことがありました。冬が去り春が近づく独特の期待感のようなものを、夜のなかで幼い心に感じていたのを思い出します。

皆さんは、どのような節分と立春の思い出をおもちでしょうか。お聞かせいただけるとうれしいのですが。

ことし一年のご健康をお祈りいたします。

文：朝倉 勇 (NPO PLANT A TREE PLANT LOVE 理事)

■ ともいき・ともうみ雑感彼是

日本人の精神の基盤である“共に生きる”、“ともいき”という価値観・生活観と“共に生み出す”、“ともうみ”という想像力・創造性の和魂（目に見えないジャパネスク）が外国のモノ・コト・文化を取り込み、それを長い時間をかけて「日本化」し、独自の新しいモノ・コト・文化（目に見えるジャパネスク）を創り上げてきた経緯は歴史が示す通りです。（「和魂漢才」「和魂洋才」「和魂米才」と「鎖国的な時代」と「開国的な時代」を繰り返しながら、祖先、先達が知恵と体験を積み重ねて創り上げてきたのです。）

世界的な視野に立って物事を考え、行動していかなくてはならないこれからの時代、日本は“ともいき”“ともうみ”の和魂を基盤として「和魂中・韓・朝・台才」、そして「和魂アジア才」へと行動を広め、深めていくべきでしょう。

目に見えないジャパネスク、和魂の“ともいき”“ともうみ”は明日を創るために、世界中がいま探し求めている普遍的なものになり得るでしょう。

隣国、そしてアジア地域の人々と一緒になって「和魂アジア才」を展開し、アジアの人びとが必要としているモノ・コト・文化を創ってあげればと考えます。

ジャパネスクは地球上の諸民族の心と生活をつなぐ、文化交流のための共通概念となり得るのです。

● これからの新しい“共に生きる”「ともいき」

われわれの祖先は、人間の側から一方的に自然を見るのではなく、人間も自然の一部であるという観念のもと、自然の大きな回帰循環する時間の経過の中で生きるということを「生活の知恵」としてきました。きっと、祖先の五感は自然とそのリズムを十分に体感できたのでしょう。日本独特の風土に影響されながら、この知恵と体験を蓄積して発達してきたのが、“共に生きる”「ともいき」という価値観・生活観であり、祖先が先達が育て、培ってきた日本人の生活のありようでした。

そして21世紀に生きるわれわれは、「ともいき」を新しい観点から捉え直していく必要があると考えます。

以下がこれからの新しい『ともいき』です。

《ひとりひとりが健康・食料・水・エネルギーそして環境問題に関心を持ち、人と共に、自然と共に、地域と共に、そして祖先と共に、子孫と共に結び合い、

助け合い、支え合い、譲り合って生きるという価値観・生活観》

● これからの新しい“共に生み出す”「ともうみ」

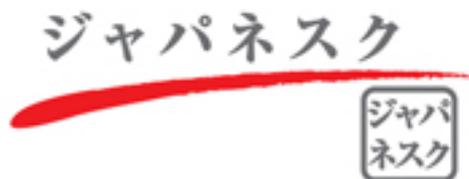
われわれの祖先は、外国からコト・モノ・文化を一方的に受け入れるのではなく、全く異質なものを共存させ、調和、融合、和合させてそれぞれの良さを生かし、「日本化」し、独特の新しい文化を創り上げてきました。この独特の新しい文化を創り上げる想像力、創造性が“共に生み出す”「ともうみ」です。

祖先が、先達が育て、培ってきた日本人の学問、科学、技術、教育などに対するありようであり、知らないことを知るという強い欲求と言えるでしょう。

グローバルな世界になり、世界的視野に立って物事を考え、行動していかななくてはならないこれからの時代、21世紀に生きるわれわれは「ともうみ」を新しい観点から捉え直していく必要があると考えます。

以下がこれからの新たな「ともうみ」です。

《「和魂漢才」「和魂洋才」「和魂米才」、そして「和魂中・韓・朝・台才」、そして「和魂アジア才」へと行動を広め、深め、そして将来を見据えた「和魂世界才」へと進んでいくべきです。》



勝田 祥三 (NPO PLANT A TREE PLANT LOVE 理事長)

■ 事務局だより

●「ともいき便り」をお読みいただいている NPO PTPL 会員の YK さんから感想のお便りが届きましたので、ご紹介します。

①いつも有難うございます。

「44号大寒号」の文を読んでいて、思い出したことがあります。昭和47年に鹿児島島の磯浜ユースホステル主催の北欧旅行に参加した折り、老人施設と保育園(?)が隣り合っていて、中央に子供の遊び場がある施設を見学しました。タイヤのブランコで遊ぶ幼児をお年寄りが楽しそうに窓から眺めていて、良い環境と施設に感心した記憶があります。日本はやっとそこまで追いつくのに40年かかったわけです。NPO PTPLがデンマーク・スウェーデンやフィンランドにもできて最新の北欧情報が入れば嬉しいです。

②七草は1月7日では露地物は育っていません。2月6日の「旧七草」の頃には露地物の丈夫に育った七草で粥を食べられます。ということについて12月に近所の石垣にハコベがでて、小鳥の餌に重宝してました。七草粥に使うと楽しみにしていたら、暮れの大掃除で抜かれてしまいました。最近また生えてきたので、お便りを読んで、旧暦で作ってみようと思います。因みに雨が当たらない西日が射す場所です。ゴチャゴチャついでにアトレ(※)にも春の七草も集めて植えてみます。散歩のときビルばかりで月も富士も見えませんが、桑の実や月桂樹の葉を採取し楽しんでいます。

(※アトレ：目黒アトレの屋上で展開中のHAND IN HAND たたみ一畳農園)

●1月末から2月3日までは、春を思わせるポカポカ陽気が続きました。三寒四温ならず一寒二温、二寒三温といったところでしょうか。暦の上では春とはいえ、まだまだ寒い日がありそうですが、着実に陽は伸び、柔らかい日差しが感じられます。寒かった冬も、まもなく終わります。

■お問い合わせは

NPO PLANT A TREE PLANT LOVE 事務局 担当：佐藤
〒105-0001 東京都 港区 虎ノ門 1-2-18 虎ノ門興業ビル 7階
電話：03-6205-7503
FAX：03-6205-7504
Email：info@plantatree.gr.jp